

インド

GDP (2020年4-6月期)

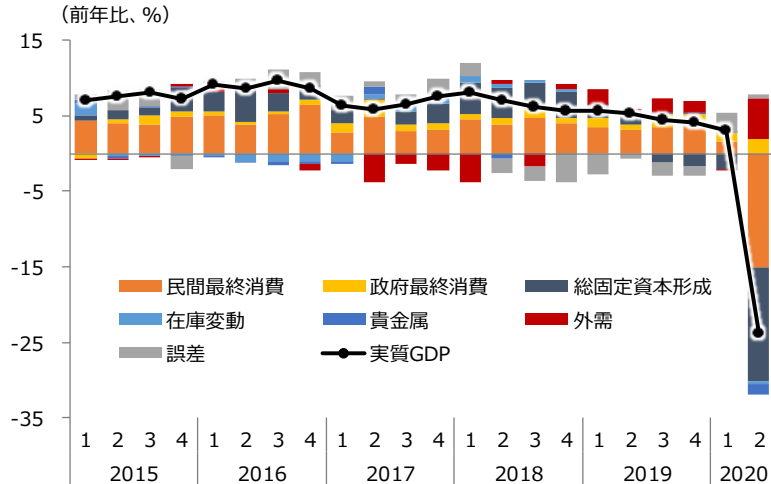
統計開始以来で最悪の大幅なマイナス成長

政策・経済研究センター

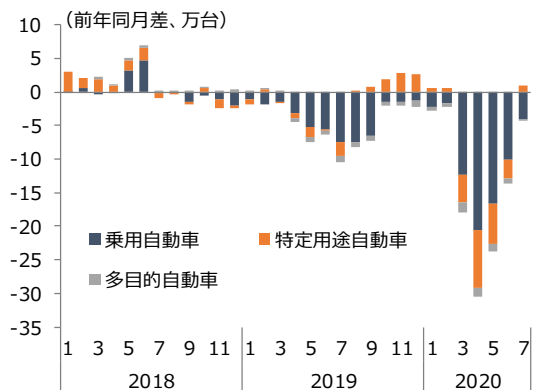
橋本拓摩

03-6858-2717

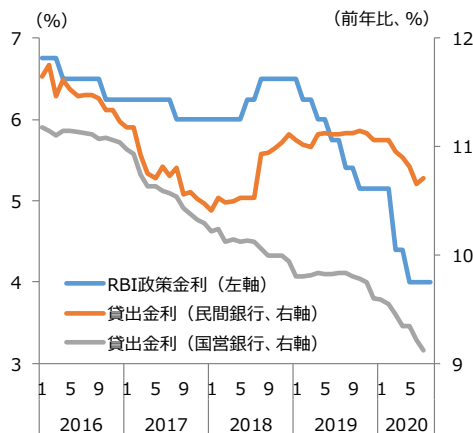
1 実質GDP成長率と需要項目別内訳



2 乗用車販売台数



3 金利動向



評価ポイント

今回の結果

- 20年4-6月期のインド実質GDP成長率は前年同期比▲23.9%と、四半期での統計開始(97年)以来で最悪の大幅なマイナス成長となった(図表1)。GDP水準としては2014年10-12月期まで低下、全土封鎖措置の経済活動への影響が深刻化している。
- 需要項目別では、民間最終消費が同▲26.7%、総固定資本形成が同▲47.1%と大幅なマイナスとなり、それぞれ実質GDP成長率を▲15.0%pt、▲15.1%ptの押し下げに寄与するなど、内需が大幅に悪化している。
- 業種別GDPをみると、建築業が同▲50.3%、貿易・宿泊・運輸・通信業が同▲47.0%、製造業が同▲39.3%と大幅なマイナスとなった。

基調判断と今後の流れ

- 新型コロナの感染拡大の前から減速傾向にあったインド経済は、3月25日から5月末にかけての全土封鎖措置により、商業施設の営業や工場の操業など経済活動の大部分が停止したことで、4-6月期に大幅なマイナス成長に陥った。
- 4-6月の乗用車販売台数は前年差67.8万台減の17.9万台となり、前年から約8割減となった(図表2)。ただし、7月の乗用車販売台数は12.6万台(前年差3.4万台)と徐々に回復に向かうなど、4-6月で底を打った可能性もある。
- インド準備銀行は5月、悪化する経済を下支えるため政策金利を4.0%に引き下げた(図表3)。一方、7月の消費者物価は、食料品価格の上昇やルピー安に伴う輸入インフレの影響などから前年同月比6.93%と、同銀がインフレ目標の上限として定める6%を上回る伸びとなっており、景気後退とインフレ率の高止まりという二つの課題に直面している。
- 8月の製造業PMIは52となり、活動の拡大・縮小の境目となる50を5ヵ月ぶりに上回るなど、企業マインドは底打ちの兆しもある。7-8月の電力需要も全土封鎖措置前の3月上旬以前の水準で推移している。
- 新規感染者数が1日8万人近くに及び、累計感染者数は360万人を超えるなど感染拡大に歯止めがかからず、経済活動を元に戻す目途が依然として立っていない。2020年度の成長率は、統計開始の1951年以降四回目となるマイナス成長を余儀なくされよう。